

にとりていみじかりければ、ふるまひおほせられけり。

〔おもひのまゝの日記〕やうく夜あけ行ほどに、小朝拜御薬の奉行の人々まゐり集りて、とくと催す。略中やがて上達部ひきつれて殿上にまゐりぬれば、小朝拜催さる。前關白大殿にて、嘉保よりこのかた、かしこき代々のあとを尋ねて小朝拜にたつ、牛車にのりて隨身十人いとめづらかなるさまなり、大殿殿上の奥の座につきぬれば、關白はしにさぶらふ、太政大臣右大臣左右大將、數を盡して卅人ばかり、殿上所せきまでつきならびたり、無名門より入ほど、思ひくりに追つれたる隨身のさきの聲々いとおどろくしきほどなり、次第に座をたちて、ゆば殿につらなりたつ、事のよしを申出御のしきなど、皆例のことなり、前關白、關白兩人ねる、これもめづらしき事なるべし、大殿笏をつきて、宿老の拜とかや用らるゝ、元弘にも故殿かやうに振舞れけるとかや。